（様式２-1）

# 令和元年度　弘前大学海外協定校学生交流活性化事業概要

部局名　　教育学部

| 区　　分 | 内　　容 |
|---|---|
| 事業名 | 「自然環境変化への人間の適応」に関する地理学的な検討による協定校との交流活性化 |
| 指導教員 | ① 小岩直人（教育学研究科） |
| 学生の所属及び人員 | 教育学研究科　修士２年　１名<br>教育学部　学部４年　１名 |
| 渡航先<br>（渡航期間） | カナダ　トンプソン・リバーズ大学：（令和１年10月27日～令和１年11月3日） |
| 実施<br>スケジュール | 令和1年　10月13日～　事前調査<br>〃　10月27日～　カナダへ渡航<br>〃　10月28日　バンクーバーおよび周辺地域での事前調査<br>〃　10月31日　トンプソン･リバーズ大学訪問<br>〃　11月　1日　研究交流会およびカムループス巡検<br>〃　11月　2日　Wells Gray Park巡検<br>〃　11月　3日　帰国<br>〃　11月　4日～調査まとめ |
| 事業の概要 | １．事業概要：<br>人と自然の関係を検討することは地理学における主要な課題の一つである．本事業は，北米大陸の氷床の縮小時に対応して拡散してきたモンゴロイドに関して，その拡散や現在の生活について現地で学び，日本における自然環境の変化への人間の対応や、自然災害について議論を行うものである． |
| | ２．教育目標：<br>地球規模での自然環境，世界規模での気候変化に影響を与えた北米大陸での大陸氷床と人間活動に関する研究事例を学びながら，青森における自然と人間の関わりについて議論を深めことにより，グローカルな視点を有する人材を育成を行うことを目標とする． |
| | ３．交流内容等：<br>カナダ西部やカムループス市および周辺地域において，氷河の拡大縮小過程を学ぶための野外巡検，ネイティブアメリカンの遺跡に関する調査，環境地理学教室における院生・学生によるプレゼンテーションを実施し、トンプソンリバーズ大学の地理学関係者との議論を行った． |
| | ４．期待される成果等：<br>近年，地理学分野においては，これまでの細分化された専門を見直し，それぞれの関連性を重視しながら地域を検討する「統合地理学」が注目をされている．本事業は，グローカルな視点で，この新たなパラダイムのもとで地域を考察することにもつながり，参加院生・学生は，最新の地理学を体得することができた． |

<table>
<tr>
<td>交流の様子</td>
<td>

【写真１：交流会の様子１】

【写真２：Secwepemcの野外博物館見学

【写真３：交流会の様子２】

【写真４：氷河を源流にもつ河川の堆積物の観察】

【写真５：協定校の空中写真判読機材】

【写真６：カムループスの扇状地堆積物】
</td>
</tr>
<tr>
<td>本事業による成果等</td>
<td>本事業は，協定校であるトンプソンリバーズ大学において，環境地理学研究室，および国際センターの大学関係者（日本に興味のある学生にも開催を通知）に，弘前大学の院生・学生が日本での研究事例の紹介をし，トンプソンリバーズ大学の教員・学生が実施しているカムループス周辺の地理学の巡検に参加，それらにおいて意見交換をしながら交流を深めるものであった．大学訪問前に、カナダの地形，第四紀後期（十数万年前～現在）における劇的な環境変化と人間活動に関して事前調査を行い，その知識をもって，大規模な大陸氷床の拡大・消長を記録している壮大な地形・地質を観察・体験し，さらにその環境変化への先住民（ファーストネーション）の対応に関して，現地における専門の研究者の解説を聞くことができた．院生・学生のプレゼンテーションの際には「青森では，縄文人は現在でも居住をしているのか？」という趣旨がつかみにくい質問がされ，回答に困ってしまった．帰国時の院生・学生との事後検討の際には，カナダでは数千年前に移住してきたファーストネーションと，比較的新しい（人種的にも異なる）ヨーロッパがらの移民の子孫が生活しているという歴史的な背景をふまえれば，「日本では縄文時代以降、混血が進み、表面上は区別がつかないが，おそらくその当時の人々の子孫が数千年間にわたり居住している」との回答をするべきはなかったか，という議論が行われた．相手の背景を考慮しながら（とくに相手の国を訪問する際には），自分たちの文化等をできる限り正確にわかりやすく伝えるということが異文化理解の基本の一つであることをあらためて体感したといえるであろう．</td>
</tr>
</table>